

与していることが示唆される。

7. 小児各種腎疾患におけるリンパ球サブセット 第3報

(腎センター・小児科) 永田 道子・川口 洋・
甲能 深雪・伊藤 克己

今回私たちは、微小変化型ネフローゼ症候群の末梢血リンパ球サブセットを two color 分析を用いて検討した。

対象は、3歳から17歳(平均11歳)の男児39名、女児12名の合計51名である。

1. Leu 3a⁺8⁻細胞(helper T細胞)は、初発、再発時に低下し、寛解期に正常化する傾向が認められた。

2. Leu 2a⁺15⁺細胞(suppressor T細胞)は、再発時のみ増加した。

3. Leu 3a⁺8⁻/2a⁺15⁺(helper/suppressor)比は、蛋白尿陽性時に近く、寛解とともに正常化した。

4. Leu 7⁻11⁺細胞は、再発時のみ増加した。

8. Ti (WT31) 陰性 CD3 陽性 large granular lymphocyte 白血病について

(第1内科)

押味 和夫・斎藤 博・溝口 秀昭

T細胞抗原レセプター(Ti)は α 、 β サブユニットから成り、これがCD3抗原と複合体を作ってT細胞膜表面に存在している。しかし最近 α 、 β ではなく、 α や δ から成るTiが発見されその生理的意義に関し注目されている。今日発表した症例は、CD3陽性でありながらTiを認識するモノクローナル抗体WT31が陰性のLGL白血病で、non-MHC-restricted cytotoxicityを有する。Tiの β および γ の遺伝子の再構成を認める。抗CD3抗体でnon-MHC-restricted cytotoxicityの抑制を認めることから、アロ抗原反応性のキラーT細胞と同様、キラー活性の標的細胞として用いられたK562, MOLT-4, Daudiなどの抗原に対し、未知のTiがレセプターになっており、抗CD3抗体がこのレセプターを介する細胞融解のシグナル伝達を乱している可能性が考えられる。CD3⁺WT31⁻でnon-MHC-restricted cytotoxicityを有するLGL白血病は本例が第1例である。

9. 自己免疫性肝炎患者におけるLeu-3a⁺8⁺, suppressor inducer細胞の選択的欠損

(消化器内科) 加藤多津子

今回我々は自己免疫性肝炎(ACAH)における免疫異常の解析を行なう目的で、ACAH患者の末梢血T細胞の解析を二重蛍光染色法を用いて行なった。その

結果、ACAH患者では同年代の健常対照群に比し選択的にLeu-3a⁺8⁺細胞が比率でも絶対数でも減少しており、他のLeu-3a⁺8⁻, Leu-2a⁺15⁺, Leu-2a⁺15⁻細胞では差が認められなかった。しかもACAH内でGPT(ALT)高値群にその減少程度が強い傾向があった。以上よりACAH患者ではLeu-3a⁺8⁺細胞、すなわち suppressor inducer細胞の低下が免疫異常のみならず、ACAHにおける肝細胞の障害とも関連していることが示唆された。

10. リンパ濾胞におけるFc ϵ Rの分布

(第2病理)

増田 昭博、笠島 武、梶田 昭

低親和性のFc ϵ Rが高IgE血症との関連あるいはB細胞の分化抗原として注目されている。またリンパ濾胞胚中心のIgEの分布は、木村病等のリンパ濾胞に屢々出現する。そこでリンパ濾胞内のFc ϵ Rの分布をIgE等の分布と比較した。消化管、甲状腺疾患、Warthin腫瘍、木村病、リンパ節、扁桃炎についてPLP固定の凍結切片を作成、H107(抗E ϵ R)、DRC-1、CR1、CR2、B1、補体成分等の分布を酵素抗体法を用いて連続切片上で比較検討した。H107は検討した全てのリンパ濾胞胚中心で明調部に一致して網状陽性像を示し、免疫電頭的に樹枝状細胞(FDC)の細胞表面特に迷路様構造に強い陽性所見を示す。被殻層の小リンパ球も陽性である。連続切片上でDRC-1と比較するとH107は明調部に限局しており、暗調部には陰性である。木村病では、H107は胚中心全体に陽性である。FDCの持つFc ϵ Rは、IgE免疫反応に重要な役割を果していると共に、FDCの「分化」のマーカーとしての性質も有するとみられた。

11. 人工透析中の患者白血球減少に関する基礎的検討

(腎センター・腎臓外科)

打越由紀子・早坂勇太郎・太田 和夫

セルロース系の膜を用いた透析療法において循環開始15分前後に患者末梢血中の白血球数が急速に一過性に減少することが知られている。Cradockらはこの原因として透析膜による血液中の補体活性化を示唆した。しかし一方、補体活性化作用のない抗OKT3モノクローナル抗体投与後の患者においてもi.v. 60分前後に一過性の白血球減少が観察されたことより抗体結合後の白血球膜表面上の荷電の変化によることが推察され、白血球をセルロース系透析膜中を通過、ニューラミニダーゼ(脱シアル酸)、AHLG(ウマIgG)、抗